

レンズを通して見た 山梨県の集落



マジョ・レチア
山梨県国際戦略グループ
国際交流員



2024年2月、私の故郷であるカナダに住む姉は天国へと旅立ちました。この世に残されたのは、数枚の写真と数点の品々だけでした。その中から古いニコンのカメラを持ち帰りました。これはベトナム戦争でジャーナリストが使っていたカメラだと言われました。今年度の初め、北海道大学に留学していたときから温めていたアイデアを思い出し、バス停を撮影し始めました。可愛いバス停を見つけて写真に撮ろうと思ったたびに、「撮ってどうするの？」「こんなものをわざわざ撮影する意味があるの？」という声が心の中に浮かびましたが、「特に理由がなくてもいいんじゃない？」と思うようになりました。次第に、私の興味はバス停から、懐かしいコカ・コーラの看板、日本の田舎で見かける不思議なキリスト看板へと移り、そして、いつしか私のレンズは、山梨の集落へと向けられていました。

以前から「限界集落」と呼ばれる、消えつつある村々の存在に興味を持っていました。高齢化が進み、人々が都市へと流出することで、冠婚葬祭などの社会的共同生活が維持できなくなり、村としての存続が危ぶまれています。日本は、この問題が特に深刻な国の一つで、毎年数十の村が消滅し、「消滅集落」となっています。これらの村は、たいてい交通の便が悪く、山深い地域に位置していることが多いです。





山梨県南巨摩郡
身延町根子

消滅した集落の有名な例として、宮崎県西都市にあった寒川集落が挙げられます。1989年に最後の住民が離村し、今では静かな自然に還りつつあります。この村には、誰もが知るアニメ作品と意外なつながりがあるのです。その作品はスタジオジブリの『もののけ姫』です。その主題歌を歌った方の母親は、この寒川出身でした。この事実は、この村をより一層魅力的に感じさせます。

山梨にも、それぞれが独自の物語を秘めた小さな村々が点在しています。深い山々に守られたこれらの集落は、長い年月をかけて、独自の言葉、文化、そして伝統を育んできました。私はこの豊かな自然の中で、カメラを通して物語を探求する旅を始めました。

南アルプスの雄大な山々に抱かれた山梨県にある峡南地域は、長い歴史を持つ仏教の地でありながら、深刻な過疎化に悩まされています。富士川町は、この峡南地域にあり、





主に山中に位置する多くの集落からなる町です。深い山々に点在する集落を訪ね歩く中で、私は数々の秘宝に出会いました。

初めて訪れたのは、標高約1000メートルの氷室神社です。雄大な杉の木々に囲まれた神社には、苔むした575段の石段が続いています。早春に訪れたとき、階段はまだ雪で覆われており、少し滑りやすかったのですが、登るのが少し難しかったです。本殿に着いた時の達成感は格別でした。境内には、樹齢千年を超えると言われる「大杉」が天に向かって力強く伸びており、その姿に圧倒されました。神社全体が、時の流れを忘れさせてくれるような、静かで穏やかな空気に包まれていました。どこか、アニメ映画『蛍火の杜へ』に登場する神社を彷彿とさせます。他の場所が静けさと古さを漂わせているのに対し、2つ目の鳥居の天井には、鮮やかな色彩と花の模様が描かれており、最近手入れされた様子が伺えました。花天井は、一般的に神社よりも寺院で見かけることが多いのでこの神社で見つけたことに驚きました。



氷室神社



2回目に富士川町を訪れたときには、友人と一緒に妙法寺のあじさい祭りに参加しました。境内に咲き乱れた約2万本のあじさいの中から、ハート形に見えるアジサイを見つけてみました。祭りの期間中だけ特別に開放された鐘楼に登りました。この鐘楼には子供しかいないため、急な階段を上り詰めて、鐘を鳴らしているときは、自分も子供の頃にタイムスリップしたような気持ちになりました。鐘を鳴らし終わったあとも、鐘楼の縁で下のよさこい踊りを見ながら無邪気に遊ぶ子供たちを見ていました。涼を求めて、古民家を改装した台湾茶のお店を見つけました。2階に正座して、窓を開けて夏のそよ風を感じながら、欄干のない窓から少し離れた場所でお茶を飲みました。店主は私たちが祭りから来たことを知ると、法力で浮かび上げた大きな岩で対決する地元の僧侶の面白い仏教伝説を語ってくれました。



古民家宿
淵明庵



古い建物を新たなものに生まれ変わらせる起業家の創造性には、いつも感心します。次の旅では、北杜市にある2つの廃校を訪れる予定です。一つの廃校舎は美術館に、もう一つはレストランに生まれ変わっているそうです。

交通の便が悪く、人里離れた村々の様子は、イタリアの私の父の故郷と重なる部分が多く、どこか懐かしい気持ちになります。南イタリアの小さな村で生まれた父は、少年時代を美しい自然の中で過ごしました。歴史の激動を乗り越え、イタリアは統一された国となりましたが、そのルーツは多種多様です。何世紀もの間、父の村は山々に守られ、外界から隔絶された独自の文化を育んできました。その村では、今も昔ながらの方言が話されており、人々の暮らしの中に物語や迷信が息づいています。イタリアもまた、日本と同様に過疎化や高齢化という課題を抱えています。父は、消えゆく方言を守ろうと必死ですが、若者たちは標準語を話すことを好み、父の願いは叶いそうにありません。



父から聞いた話ですが、私の曾祖母は文字の読み書きができなかったにも関わらず、口承文芸の宝庫でした。曾祖母の物語の中には、古代ギリシャへと遡るものもあり、豊かな想像力を掻き立てられました。しかし、彼女の死とともに、世代から世代へと受け継がれてきたこれらの物語の多くは消えてしまいました。

日本の村とイタリアの村に見るこの共通点に、私は強く惹かれます。まるで時間が止まったかのようなそれらの孤立した集落の中に、数千年の時を超えて受け継がれてきた伝統が息づいています。しかし、近代化の波は確実にその記憶を侵食し、我々の貴重な文化的遺産が失われる危機に瀕しています。

